

科学者も参加へ

運転差し止め追加提訴



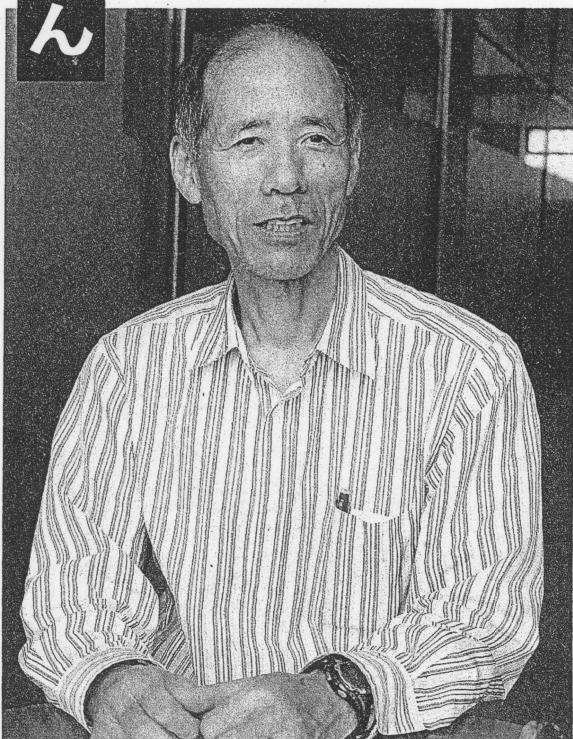
工藤さんは大分県立高校教員を経て、1992年から大分高専で指導に当たつてきました。原発は「どちらかといえば反対」の立場だった。旧ソ連の Chernobyl 事故などを見て「危ない」と思つてはいたが、自ら運動に参加することはなかつた。

ボランティアは「科学者としての罪滅ぼし」の思いから度々、福島県を訪れ、津波被害を受けた地域で側溝の泥上げ作業などを手伝つた。だが東京電力福島第1原発事故は衝撃だった。原子炉の緊急停止が成功したと聞き、「さすが日本」と思つたのもつかの間、全電源喪失で炉心の冷却ができなくなり、原発も2回訪問し、一面に立ち並ぶ汚染水タンクを目の当たりにした。

伊方原発を意識するようになつたのは、活断層に注目が集まつた16年4月の熊本・大分地震。「中央構造線があんなに近いのに再稼働を許可するなんて」。福

「自然に対し人間は無力」

元大分高専教授の工藤さん



大分県民264人が四国電力伊方原発（愛媛県伊方町）の運転差し止めを求めた大分地裁の訴訟で、新たに110人以上が11日に追加提訴する。元大分高専教授（物理学）の工藤康紀さん（65）＝大分市＝はその1人。東日本大震災で被災した福島県でボランティア活動を続け、自ら志願して福島高専の教壇に立っていた。今春に帰郷して裁判を知り「自分にできることをしたい」と加わった。

伊方原発運転差し止め訴訟で追加提訴の原告に加わる元大分高専教授の工藤康紀さん(大分市内)

島を見た経験から「自然に
対して人間は無力。想定外

スなど新しいエネルギーが育つて いる。国は原発に頼らない政策へと方針を転換すべきだ」。裁判が思いを伝える場になれば、と考えている。

